

明・清時代の四川における地上院落式家族墓について

—— 匠師と造営方法を中心に ——

曹 鋭

はじめに

明・清時代の中国の四川省では、数多くの「地上院落式」の墓が現れた。これは、明代中期ないし後期に始まり、その後も続けて発展し、清の中期および後期に四川地域で最終的に普及した、葬儀のための建物を設置する形式である。

この「地上院落式」と筆者が名付けた形式の墓は、各個の家族の墓が集まった形で存在し、件数がきわめて多く、地域的分布も比較的集中している。特に四川省の北部と東部の山間地帯に多い。近年では南部でも発見されている。そして、同じ時期の四川以外の地域では、広東省や福建省などでも確認できるが、その性格は四川のものとは全く異なる。また、形式的特徴においても、他の時代や地域の墓とは異なり、土の丘を築造するだけでなく、その前方に「庭」のような構造すなわち「院落」を有している。また、地上に存在する「院落」の前方には、「牌坊」⁽¹⁾のような建築物が重なり合い、そして、これらの表面には複雑な彫刻の装飾がある。要するにこれらの墓は、特定の地域社会で共有された特異な形式であることが理解できる。また、それらが昔からの主流な墓の形式とは明確な違いがあることも明らかである。

その中の一つの代表として、筆者は以前、四川省巴中市黒馬山の李氏家族（李在明と李映元）墓を例にとって、その墓葬構造の特徴と碑文類に記された情報について分析した。しかし、この「地上院落式」家族墓は、決して李氏家族墓に見られる一種類だけではなく、その構造や外見は所在地・建築年代・建造にたずさわった大工（匠師）などにより、相違がはっきり認められる。そこで本稿では、前の個例研究を踏まえ、また、昨年実施した現地調査の資料に基づき、この「地上院落式」家族墓を構造上の特徴により分類し、それぞれの形式・規模・彫刻装飾に関する諸問題をより深く検討する。また、個々の家族に即して、その家族墓を建造した匠師や実際に作業した職人などを分析し、その作業の性質や方法により、同じ地域で活動していた匠師グループの作品の形式などの変化を分析する。その中で、王氏家族墓⁽²⁾・大田坎李氏家族墓群⁽³⁾・苟氏家族墓⁽⁴⁾のように匠師の名前が弁別できる例は、たいへん注目すべきである。特に王氏家族の王居恭・王思級父子墓は所在地が近く、精巧に作られており、また構造物の保存が完全であり、建造した匠師に関する碑文も釈読できたため、本稿で中心的に取り上げたい。王氏家族の子孫は今で

も近辺に住んでいて、今回の調査ではその人たちのインタビューもできた。それ故に、清の中期から後期にかけての四川省巴中市平昌県周辺の「地上院落式」家族墓の建築方法や造営の経緯なども推測できると考えられる。同時に、四川省の「地上院落式」家族墓は主に移民家族の墓であるという事実を踏まえて、それらの移民家族墓と宗族の祠、及び家屋などの建築物との関係性を考え、それらの移民家族墓の実用的な機能と特殊な意味について詳しく検討することも可能である。

一 「地上院落式」家族墓の特徴と形式分類

（一）墓葬の形態的特徴と構成の共通性

明・清時代の四川、特にその北部に多く分布する「地上院落式」家族墓は、一人だけを埋葬したものではなく、題目にあげたように「家族墓」と称し得る。すなわち、中央にはこの家族を代表する者、そして両側にはその家族が埋葬された墓である。また、これらの墓の墓主は、この地方における一般的な家族の中では、身分や輩分⁽⁵⁾などが高くて、家族を代表する者である。それ以外の家族メンバーの墓は、二つのタイプがあって、一つはこれらの「地上院落式」墓の周りに、墓碑と封土だけの簡単な形式で作られるタイプであり、もう一つは、同じ家族の先人の「地上院落式」墓の牌楼を利用し、自らの墓碑を牌楼の両側に添えるタイプである。一般的にそれらの墓は総面積数十ないし数百平方メートル以上の大型の地上建築であり、その正面にはいくつもの牌楼（図1）と呼ばれる石造の建築物が建てられる。墓ごとに牌楼の数・建築形式・彫刻様式などはそれぞれ異なっているが、基本的には後ほど述べる形式分類に従って同じ類別の中に共通性を持っている。

筆者は其中で、問題にする「地上院落式」家族墓が多く分布する四川北部の巴中市、即ち清



図1

代の保寧府において、現在までのところ合計十七件の地上院落式の墓を詳細に現地調査した。付表1に示したように、その調査済みの墓はほぼ清時代のものであり、またいずれも年代は清時代の後半、即ち十八世紀後半から二十世紀の初めに建造されたものである。しかし、その地域の「地上院落式」家族墓に関する文献資料によれば、明の万暦二十八年、即ち西暦一六〇〇年に建てられた何後泉の墓のような早い時期の例もいくつか存在する⁽⁶⁾。それ故に、この地域に特徴的な「地上院落式」家族墓は、清時代をさかのぼる明の中後期から出現したが、このような墓葬の築造が最も集中した時期は清の中期から後期であり、また、建築形態と造営様式が成熟し定形に至るのもこの時期であると考えられる。

ところで、「地上院落式」家族墓とは、四川北部のこれらの家族墓の形態的特徴をとらえて、筆者が名付けた呼び方である。それらの墓は、具体的には「地上」と「院落」という、二つの基本的な特徴を持っている。

先ず「地上」とは、図2に示す通り、墓を構成する建築物などがすべて地面より上にあるというものである。参拝者の動線を示す三つの矢印の順により、前方の牌楼や碑などの建築物、また後ろの土の丘、即ち遺体が埋められた封土も全部影で示した土地の上に位置することが分かる。そうすると、遺体を地面の下に埋めないため、このような墓を建てる時には地面を掘る必要がない。

次に、「院落」とは、封土の前の建築物の群れを指す。「院落」の中によく見られる建築物には、

表1 四川省巴中市平昌県清代「地上院落式」家族墓調査統計表

調査年月：2017年12月・2021年8月

番号	墓主名	年代		建築匠名	家族住宅との位置関係
		年號	西歴		
1	唐芝福	乾隆三十三年	1768	—	元家族住宅と蓮の池の間に存在し、今では廃棄されている
2	李在明	乾隆五十年	1785	—	元家族住宅は道路修築のため破壊され、現家族住宅は墓から徒歩5分程度
3	王居恭	嘉興二十二年	1817	王□□	家族住宅の後ろ、約15メートルの場所に位置する
4	李映元	道光六年	1826	—	基本状況と李在明墓同じ、なお現家族住宅との距離は前者より近い
5	王思綬	道光十五年	1835	王琴林・王芷林	家族住宅と密着して、昔覆い屋があつてた(後人口述)
6	王 枚	道光十九年	1839	—	—
7	李吉賢	道光二十八年	1848	—	—
8	李時虞	咸豐三年	1853	李時永・李懷興	家族住宅との間に小さな池があり、その住宅は元の家族住宅かどうか確認待ち
9	苟維模	咸豐三年	1853	蒲玉川	—
10	何履福	同治九年	1870	—	家族住宅の後ろ、約25メートルの場所に位置する
11	苟端文	光緒六年	1880	—	墓の右側は廃棄された家族住宅、現家族住宅は墓の左側に位置する
12	苟希文	苟端文と近い時代	—	□□全	—
13	雷輔天	光緒六年	1880	—	元家族住宅は破壊され、現家族住宅は墓から徒歩8分程度
14	鄧紹芳	光緒十九年	1893	—	—
15	任存万	光緒二十年	1894	—	廃棄された家族住宅と密着して、覆い屋があつてた痕跡(壁)が残っている
16	李静観	光緒二十八年	1902	李懷興	李時虞墓と同じ広場と「華表」を利用し、状況も同じ
17	苟德培	光緒三十年	1904	劉三益	苟端文墓の左側に位置し、本墓の左側と現家族住宅と密着する

*発表者が表記の地区で2017年12月・2021年8月に現地調査をおこなった墓の一覧。

*並び順は、墓碑などから判明する墓の築造年代順。

*同じ色の墓主は同じ家族に所属する。但し、直系親族とは限らない。

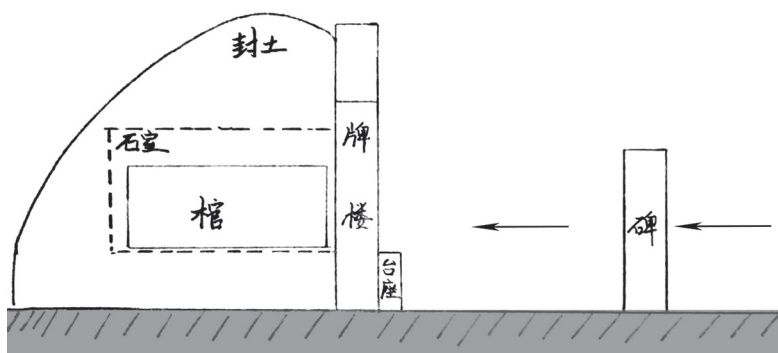


図 2

表 2 四川省巴中市平昌県「地上院落式」家族墓の建築構成の説明表

	建築構成				
	華表	字庫	神道碑	牌楼	墓主像龕
図例					
基本情報・機能	常に対になって、「院落」の最前方の両側に配置され、墓前の広場の範囲を示している。	常に対になって、広場の後部、又は「院落」の前部の両側に配置される。 祭祀の際に紙で作ったお金、又は書いた詩や文章などの供え物を穴の中に入れて燃やす。	後壁の前方で、「院落」の中心軸に配置される。 表側は常に墓主の名・号と直系親族の名前を刻まれ、裏側に墓の建築時間・位置・向き方向、又は家族姻戚の名前を刻まれる。	墓の中心軸に沿って配置され、その数は一つでは限らない。常に空間(院落の部屋)を分ける扉として使って、その下部には人が通れる穴がある。 また、墓の後壁を牌楼の形に造る例も多く発見され、牌楼は「地上院落式」墓の中に、最も重要な建築構成であると思われる。	図例の赤い方形を示すところは墓主像龕であり、主に牌楼形の後壁の上部の真ん中に安置される。 常に「八」字形の回廊の形式で表して、龕の中には墓主夫婦とその使用人の像が安置されている。

獅子、華表、字庫、牌楼などがある。各建築物の様態と機能の説明は付表2の中に詳述した。また、筆者の研究の最初の事例として取り上げた李映元墓は、この種の墓の「院落」部分の建築構成を説明するに最もふさわしい例である。李映元墓の模型の写真(図3)の中の半円形が示している封土は、「院落」建築の一番後ろにあり、後壁と繋がる石室(棺を置く場所)を覆っている。更に、その前の建築物の組み合わせにより、少なくとも一つの囲まれた空間が成立し、その空間はほとんどの場合は天井が無く、建築物が壁や屏風のように繋がって、囲まれた庭、つまり「院落」のような形式になっている。それ故に、筆者はそれらの墓を「院落式」家族墓と呼ぶことにした。

上述の説明を踏まえて、本稿で論ずる「地上院落式」家族墓は、「地上」と「院落」という二

つの特徴を共に持っていることが確認できた。また、中国の歴代の一般的な墓葬では、いずれの時代においても、全て土を掘って地面の下に墓室という建築空間を作っている。地上に見えるのは、祭祀のために造られた建物以外に封土だけである。たとえ同じ明・清時代でも、四川以外の地域では、墓の中心的な建築物も地下に作られていて、「地上」と「院落」の二つの特徴を共に持っている墓は管見の限り見当たらない。

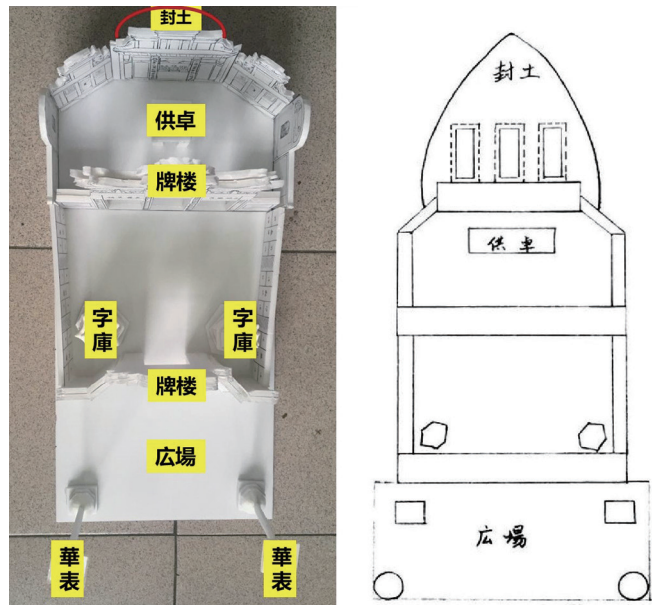


図 3

(二) 墓葬の分類と先行研究

これまでの墓葬研究では、「地上院落式」家族墓はほとんど議論されたことがなかったが、その形式や、ここに埋葬された墓主の身分が移民家族の者であるという特殊性ゆえに、筆者はこうした「地上院落式」の墓に注目することになった。

また、「地上院落式」家族墓の形式は後ほど論述する造営方法の特殊性により、ざっと見れば、それぞれ独自の形式を有しており、明確には分類し難い。そのために、ここでは前に言及した王氏家族墓・大田坎李氏家族墓・苟氏家族墓の三つの家族墓の建築形式を分析し、主に二つの種類に分別する。一つは図3に示した李映元墓の模型のように、天井が無く、院落が複数ある形式である。もう一つは図4のように、牌楼又は碑の後ろに墓室（方形の影で表した部分）がある形式である。この形式の牌楼の手前には、今は無くなっているが、元々は広場が作られていた。

これまで筆者は、一昨年の『美術史研究』に発表した論文で、巴中市の李映元の墓を中心に、四川省北部に存在する「地上院落式」家族墓の意義を検討した⁽⁷⁾。そ

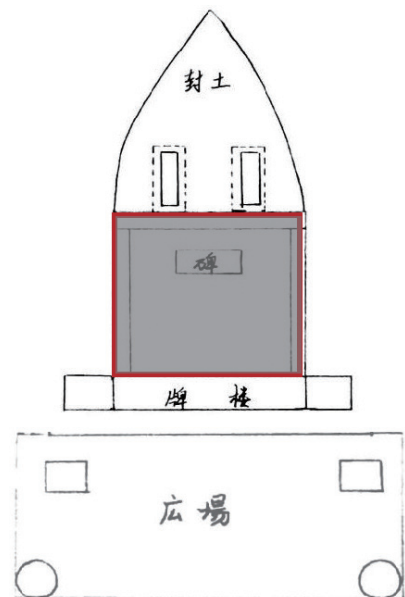


図 4

ここでは、墓の建築様式と装飾図像の特性から、それらの墓と明清時期に四川省で建造された他の地上建物の間に見られる同様の特性と構造について分析した。更に、元代後期から明代にかけて、氏族の儀式や氏族の概念において生じた極端な注意すべき状況により、それらの墓と氏族の祠の性格の一端を明らかにした。同時に、「地上院落式」墓の各空間の実際の機能についての分析を通し、移民家族の墓という特別な建築物の背後にある深い理由と、この特別な形態で建てられた墓の重要な意味を新たに明らかにした。すなわち、それらの墓は、「牌坊＋祠＋墓」という三重構造を示し、それが「記念＋祭祀＋葬儀」という三つの意味と機能を体現していると考えられる。

次に、「地上院落式」家族墓に遺された碑文などの文字情報によれば、これらの家族たちは、四川に代々土着した者たちではなく、広東や広西・湖南や湖北など、中国の東南部地域から四川に移住した者たちであることがわかってきた。例えば、付表1の5番の王思級墓の碑文には、次のような文辞がある。

始祖志權／子長朝／元子王賢王舉／住樓子石上营／後分支白雲寨／三子……

錫祖子永六七／住新寧縣觀音寺坝／珣祖乃吾嫡祖也／生二子／長永一／次永二……

ここから、王氏の先祖が湖南や湖北に住んでいたことがわかる。更に、それらの墓は、四川に移住した移民家族の者たちが家族の力を示すためのものだったと認識でき、即ち、墓という建築物自体が移民家族の身分を構築し表明するものという意義をもったと考えられる。筆者以外では、重慶師範大学の羅曉欽氏が数多くの基礎調査を行い、これらの墓の彫刻の主題や、墓主像を安置した「亡堂」、即ち赤い方形で示したところについて研究している。羅曉欽氏の研究によれば、「亡堂」は墓の中で最も重要な部分として、常に一番高い場所に配置されたという。

以上の先行研究、特に筆者によるこれまでの調査研究を踏まえて、本稿のねらいははっきりしている。すでに述べたように、「地上院落式」家族墓とは、棺つまり遺体や、墓固有の建築物がすべて「地上」にあり、そうした墓は四川省では北部をはじめ東北部・南部などでも見出せる。一方、広東省や浙江省などの地域にも地上院落式の墓が存在するが、それらはいずれも清代の人々が再建したもので、しかも当時亡くなった人の墓ではなく、仮想された「先祖墓」である。このことは、地元の文物局による墓葬調査の図録（『広東文化遺産・古墓葬卷』・『温州古墓葬』）に収録された基礎情報から、筆者が統計・分析して得た見解である⁽⁸⁾。つまり、墓主は実際の明・清時代の人ではなく、先祖として仮託された古代の人物である。

こうした、特殊な建造位置・特殊な地域的分布・特殊な建築構成という、三つの特殊性を鑑みれば、必然的に、「地上院落式」家族墓が四川地域だけに成立した原因と、その造営経緯に注目すべきだと思われる。また、それらの墓には、他の時代の墓より、非常に豊富な文字記録が刻まれていて、その内容は家族の族譜、実際の造営者に関するもの、買地券、祭祀の要望に関するものなど多岐にわたる。それ故に、それらの建造者、即ち匠師⁽⁹⁾とその造営方法についても検討の余地があると思われる。

二 王氏・李氏・苟氏家族墓の形態と現況

そこで、明・清時代の保寧府、即ち現在の四川省巴中市の「地上院落式」家族墓の匠師と造営方法を検討するために、昨年筆者が調査した平昌県の墓の中から、匠師の名前が弁別できる例を三つ選んだ。その三つの家族墓は、所在地が明確にわかり、建築構造がほぼ完全に保存されており、建造した匠師に関する碑文も釈読できたため、本稿では中心的に取り上げたい。また、現地ではインタビュー調査も行ったので、それも加えて、清の中期から後期にかけた四川省巴中市平昌県周辺の「地上院落式」家族墓の建築方法や造営の経緯などが推測できると考えられる。これから、付表3を参照しながら、上述の三つの家族墓それぞれの特徴・彫刻様式・造営状況などについて見ていきたい。

(一) 王氏家族——王居恭墓・王思級墓

王氏家族墓は平昌県筆山鎮觀寨村に位置する王居恭（一八一七年没）・王思級（一八三五年没）の父子に属する二つの墓を指す。付表3に示したように、父親の王居恭の墓は現在の保存状況はあまりよくないが、その形式は神道碑と牌楼が一つずつあり、それらの前方是一对の石燈籠で構成された広場であることが分かってきた。山との境が分別できない封土を除いて、広場部分を含めて測ると、王居恭墓の総面積は二十平方メートルを超え、全体から考えて中型の「地上院落式」墓であると思われる。また、正式な調査報告書はなく、筆者の調査でも尸骨や棺の痕跡は見出せ

表3 四川省巴中市平昌県王氏・苟氏・李氏「地上院落式」家族墓建築構成統計表

番号	墓主名	年代	墓主人数	建築構成									
		西歴		華表 (対)	石獅子 (対)	字庫 (対)	石燈籠 (対)	広場	神道碑	牌楼	墓主像龕	墓主牌位	墓室
1	王居恭	1817	2	×	—	×	○	—	○	○	○	×	×
	王思級	1835	2	○	—	×	×	○	×	2	○	×	×
2	苟維模	1853	2	—	—	—	×	○	○	○	○	×	○
	苟端文	1880	2	—	—	○	×	○	○	○	×	×	×
	苟希文	—	2	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×
	苟德培	1904	4	×	—	×	×	○	○	×	×	—	×
3	李時虞	1853	2	○	—	×	×	○	○	×	×	○	×
	李静観	1902	4						○	×	×	3	×

*表中の○は1件有り。×は無し。—は不詳を示す。

*牌楼の数は後壁を含めて数えた件数

なかったため、墓主の埋葬状況は確定できないが、石室（墓室）の状況から見ると、時期を異にして亡くなった夫と妻二人の合葬墓であることが確認できた。墓は側壁がなく簡単な形式であり、参拝者の目線からすると、広場部分の前方の左右両側に各々二層の石燈籠があり、その前方の中軸上に神道碑がある。神道碑の外側に石碑を保護するためのあずま屋がある。その四つの面にも彫刻があり、左右両側面には浅い浮き彫りで讃文が刻まれ、また、正面と背面には高い浮き彫りで雲に乗る仙人が六体ずつ表されている。そして、神道碑を越えたその前方は牌楼形に造られた後壁である。後壁は二層構造であり、その下層は柱で三つの部分に区切り、左右両側には官服を着る人物を彫刻し、中央には木造建築の扉を模した彫刻があってその奥に更なる空間がある様子を示す。後壁の上層は、高さが異なる三つの部分に分かれ、左右両側には丸彫りに近い深い透し彫りで花の装飾を表し、中央は墓主像が安置された龕である。

それに対して、王居恭墓の右下に位置する息子の王思級の墓は牌楼と側壁、または牌楼形の後壁で一つの「院落」が構成されている。その「院落」の前方には、一対の華表で示した広場がある。父親の墓と比べて、王思級墓の規模は明らかに大きく、総面積はほぼ百平方メートルになる。しかも、王思級の墓はL字形に建てられた王氏の住宅と密着しており（図5）、住宅で囲まれたようになっている。また、王思級墓の牌楼形の後壁（図6）と左側壁（図7）から見ると、墓の

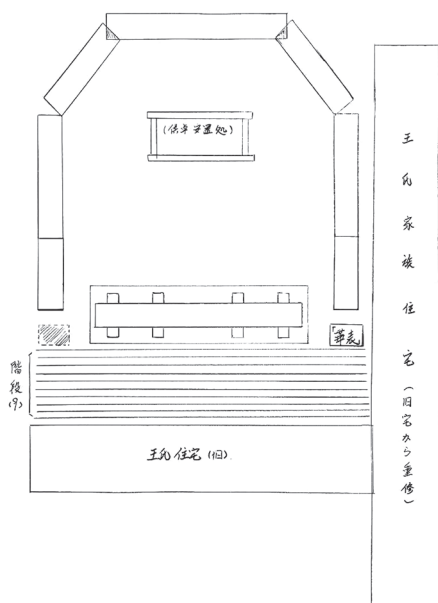


図5

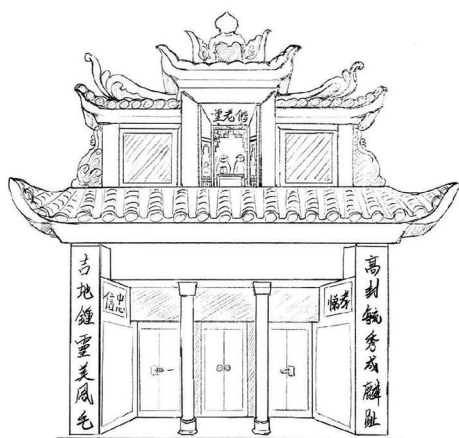


図6

装飾彫刻は全体に丸彫りのような高い浮き彫りが多いことも明瞭な特徴である。また、王思級墓の後壁は前に言及した李映元墓と同じく下層には後壁の厚さを利用して龕のような空間を作り、更に木造建築の扉を模して造られた壁面を具え、奥の空間の奥に更に空間があるような表現、すなわちあたかも三つの「院落」があるかのように作られている。

以上のように、王氏家族の王居恭と王思級父子二人の墓の彫刻の主題や手法は、高い程度の一貫性をもち、また、設計理念としても龕という建築構成を利用してできるだけ墓の空間規模を大きく表そうとしたことが読み取れる。

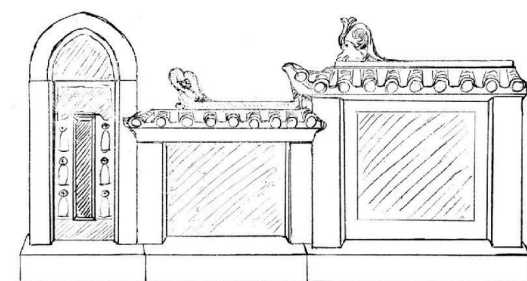


図 7



(二) 李氏家族——李時虞墓・李静観墓

四川省巴中市平昌県土興鎮大田村に位置する李時虞（一八五三年没）・李静観（一九〇二年没）父子に属する二つの墓は、大田坎李氏家族墓群を代表する墓葬と認められる。大田坎李氏家族墓群の総面積は約一八〇平方メートルあり、上述の二つの墓を中心に、他の李氏族人の墓碑なども見られる。それらの墓の年代により、この墓地は咸豊三年（一八五三）に建てられた李時虞墓から始まり、民国七年（一九一八）に建



図 8

造された李時唐墓まで、約七十年間継続して使われた。父親の李時虞墓の形式は神道碑と牌楼形の後壁が一つずつあり、それらの前方は一对の華表で構成された広場であることが分かる（付表 3 参照）。また、周りに石で造られた壁面があるため、李時虞墓の封土と山とがはっきり分別でき、具体的な様子をよく見ることができる。李時虞墓の封土の状況から見ると、正式な調査報告書はないが、墓主の埋葬状況は時期を異にして亡くなった夫と妻二人の合葬墓であり、また、後壁と封土の間を繋ぐ建築構成が見当たらない、つまり棺が安置された石室と後壁が密着していない

め、李時虞墓の建築方法と設計意図は上述の王氏家族とは異なっていたと推測できる。李時虞墓の後壁（図8）はほぼ装飾彫刻がなく、その上部だけ屋根付きの牌樓の形で高さの異なる三つの部分が造られている。そのうち左右両側は「寿」と「福」の彫刻を飾り、中央は龕の形で扉を開いた厨子状に作られ、内部には石で彫刻した墓主の位牌が安置されている。後壁の前方には、あずまやで囲まれた神道碑があり、あずまやは表側と裏側だけ対聯と中国の民間伝説の中の吉祥人物像などを装飾として彫刻している。神道碑自体は装飾文様がなく、表は墓主夫婦の墓誌であり、裏側には李氏家族の状況と直系親族の譜系名が刻まれる。

その右側に位置する息子の李静観の墓には同じく神道碑と牌樓形の後壁が一つずつあり、それらの前方は一对の華表で構成された広場である。参拝者の視線には、広場を越えて先ずは石碑を保護するためのあずま屋の中に安置された神道碑が見える。李静観墓のあずま屋は完全に四方柱の形である（図9）。その四本の柱の上にはそれぞれ彫刻文様があしらわれる。正面には掛け軸の形に作られた対聯が刻まれ、彫刻の表面に赤・黒・青などの下塗りも残る。相對する裏側も同じ装飾方法を用いている。それ以外の柱の各表面には「二十四孝」の物語と中国民間伝説の中の吉祥人物などが刻まれる。上述の装飾文様の表わし方は浮き彫りと平面的な絵画が共に存在し、秩序があるうえに、豊富な装飾表現手法が追求されている。内部の神道碑本体には、東の側面から時計回りに連続して墓主の生涯の経歴や当時期の李氏家族の繁栄した様子を讃える文章が刻まれている。神道碑の前方は牌樓形に造られた後壁である。後壁の形式は左側の李時虞墓の後壁とほぼ同じで、装飾彫刻文様がなく、その上部だけ屋根付きの牌樓の形で高さ異なる三つの部分が造られる。李時虞墓と異なるのは、その三つの部分はすべて龕の形で扉が開いている厨子状に作り、内部は石で彫刻した位牌を安置する。また、後壁の龕の数が他の墓より多い原因は、墓主の牌位をそれぞれ別々に安置しているためである。その三つの位牌のうち中央は墓主夫婦の位牌であり、左右両側は男性墓主の二人の妾それぞれの位牌である。つまり、李静観墓は男性墓主と妻と二人の妾の合計四人の墓である。

李時虞・李静観の墓を見ると、その装飾は高い浮き彫りと平面的な絵画的表現が共に存在し、また、親子二人の墓の彫刻主題と手法が一致することが分かる。しかも、李時虞・李静観の墓は同じ華表と広場を共有しており、二人の墓は一つの「院落」になっていることも検討すべきものだ（図10）。



図9



図10

(三) 苟氏家族——苟維模墓・苟希文墓・苟端文墓・苟德公墓

最後に、四川省巴中市平昌鎮龍鎮老鷹村に位置する苟氏三代目先祖の苟維模（一八五三年没）と彼の子孫である苟希文（一八七七年没⁽¹⁰⁾）・苟端文（一八八〇年没）・苟德培（一九〇四年没）の墓について分析したいと思う。上述の王氏・李氏家族と異なり、苟氏家族は平昌鎮の鎮龍鎮を中心に、巴中市の他の県にも旁支がある地元の大家族である。それ故に、筆者が調査できた苟維模墓・苟希文墓・苟端文墓・苟德公墓の四つの墓も、同じ家族とは言え、所在地や造営形式などは王氏・李氏家族墓のような高い程度の統一性を持っていない。上述のような墓の状況をつつ説明すると、混乱する恐れが

あるため、墓主たちの苟氏家族の中での血縁関係に従って、各墓の代表的な特徴を述べ、その中で苟氏家族の墓葬造営理念と共通性などを確認したい。

苟氏家族の後人が編集した族譜⁽¹¹⁾から、上述の家族墓の墓主たちの血縁譜系図が作れる（図11）。譜系図によると、三代目先祖の苟維模は上述の四つの墓主の中で輩分が一番高く、苟氏家族において非常に重要な人

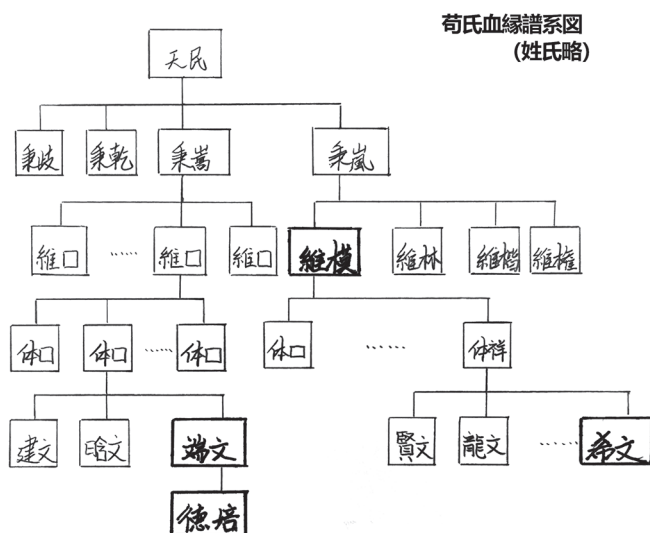


図11

物という。しかし、苟維模墓は苟氏家族墓の中で最も精妙で複雑な彫刻を持つものの、その原因はそれだけではなく、墓という建築物自体の機能にも関係がある。苟維模墓は墓室付きの形式であり、牌楼の前方に置かれた華表や獅子などは後世の道路修築のため、今では散逸したが、牌楼（図1）と墓室、また墓室の中にある神道碑は残っている。苟維模墓の牌楼は現在使われている道路の隣に位置し、その形式は、二層構造の主牌楼と左右両側の付属族人の墓碑で組み立てられた複合建築である。両側の付属族人の墓碑は保存状況が良くないので、判読ができないが、所有者は苟維模と同じ血脈の後代であることだけは分かる。そして、主牌楼の一層は五間に分かれ、左右両側は二対の木造様式を模した裏院落の扉が対称的に配置されており、中央には門洞が設けられ、墓室に入る入口になっている。また、主牌楼の二層は墓主像を安置した龕を中心に、その周りに五つの屋根のある浮き彫りの装飾構成が配置されている。上述の五つの装飾構成の一つは墓主像龕の頂部に位置し、「福・祿・寿仙人」の主題が彫刻されている。他の四つには、墓主像龕の左右両側に二対ずつ、上下分けて配置され、そのうち上部の一对の装飾構成は高い浮き彫りで牡丹の花を表し、また下部の一对の装飾構成には伝統的な「拜寿・仙人賜宝」などの場面が彫刻された。それらの中心に位置する墓主像龕は、八字形の庭院建築を呈しており、その横額には「不朽亭」と刻まれている。龕内には墓主夫婦の他に複数の使用人の像も見られる。牌楼から入る墓室は券頂の単室で、後壁を抜いていることから、内壁の右側に刻まれた苟氏族譜と族規（家族のしきたり）などの文字もはっきり読むことができる。また、墓室の後壁の正前部に位置する碑には対聯と墓誌が刻まれ、碑の前に石製の香炉も配置された。これらの碑文などから、この地方の苟氏家族の基本的な情報を知ることができる。

苟維模の墓から南に五分ほど歩くと、孫の苟希文の墓がある。苟希文墓の最も注目すべきことは、その「院落」を表示する土塼（側壁）が極めて低くて、高さが1メートルにも足りないことだ。また、その後壁は牌楼形ではなく湾曲した壁が建てられていることも、調査した墓の中で唯一の例である。苟希文墓の建築は後壁と側壁が繋がり、華表・獅子・字庫などの建築物と共に一つの「院落」を構成する形式である。参拝者の動線によると、土塼の開口部から入ると石板で構築した神道がある。神道の周りを見ると、まずは「院落」前部の左右両側にそれぞれ配置された一对の石獅子と一对の字庫が見られる。石獅子の高さは約二メートルあり、その位置は字庫より入口に近い。字庫は六層の六角塔であり、台座を含めて高さは三メートルを越え、下から二層目の後壁に向かう側面に穴が開いていて、そこで紙製の供物を入れて燃やす。次に、神道の終点に至ると「院落」の中心に位置する供卓と神道碑が見える。神道碑は亀形の台座に載せてあり、台座を含めると字庫よりも少し高く、苟希文墓の中で一番高い建築構成である。神道碑の表は墓主の墓誌を刻み、その周りには絡み合う龍の形が彫刻されている。そして、碑の裏側には、墓の位置方位と墓主の直系親族の名前が刻まれ、その両側に一对の対聯がある。最後には、墓の後壁に至り、その湾曲した壁の頂部に安置された横額に「蓬萊仙島」の文字が刻まれている。苟希文墓

の後壁や墓全体には、特に彫刻文様が少なく、主に讃文や詩などの文章が刻まれている特徴を持っている。

上述の墓からちょっと離れて、同じ鎮龍鎮の他の村に位置しているのは、苟端文・苟德培父子のそれぞれの墓である。苟端文は上述の苟希文と同じく苟維模の孫輩で、苟端文は苟維模の堂兄弟の孫であり、苟維模と苟希文に所属する「幺房」と違い、「三房」のの者である⁽¹²⁾。父親の苟端文の墓の形式は王思級墓とよく似ていて、前方の牌楼と神道碑と後壁で一つの「院落」が構成される。その後壁には彫刻文様がないが、前方の牌楼と神道碑は高く複雑な浮き彫りを刻んでいる。また、墓は高さ〇・五メートルぐらいの基壇の上に設けられ、その基壇の前の左右両側に半径二十五センチほどの台座がある。台座の中心には穴が開いており、当初は華表などの建築物があった可能性が高い。平台に登ると、先ず牌楼の前に配置された一対の字庫が見える。字庫は左右両側にあり、三層の四方塔の形で、台座を含めて高さは約一・二メートルあり、下から二層目の中軸に向かう側面に穴が開いており、そこに紙製の供物を入れて燃やす。次の正門部分は中央にある二層の牌楼と左右両側の木造を模造した壁で構築している。その表側は、牌楼の一層を三間に分けて、左右両側には浮き彫りで帳内の門神像を彫刻し、中央には門洞を設け「院落」への入口とする。また、牌楼の二層は縦に「孝義流芳」と刻んだ匾額が安置された方形の龕を中心に、その両側に屋根付きの浮き彫り人物群像で構成された装飾がある。それに対する牌楼の裏側には、一層の門洞の左右両側に浅い浮き彫りで詩や賛文などが刻まれ、また、牌楼の二層は縦に「帰魂堂」と刻んだ位牌を安置した方形の龕を中心に、その両側に高い浮き彫りで花文様の装飾が表されている。「院落」に入ると、その側壁は左右対称な高さが異なる三つの屋根付きの石板で構築され、その石板にも詩や賛文などが刻まれている。上述の建築構成を中心に、方形基壇に載った神道碑が配置される。苟端文墓の神道碑はあずまやの中に安置され、碑の表は墓主の墓誌と家族の移民史が刻まれ、その外側のあずまやは瑞獣・仙人・二十四孝などの主題と対聯が彫刻される。そして、碑の裏側には、墓の位置方位と墓主の直系親族の名前が刻まれる。その外側のあずまやは魚やリボンが絡んだ卷子などの吉祥文様を彩画したものを極めて浅く浮き彫りし、その両側にも一対の対聯がある。

上述の苟端文墓の後ろの左側には、息子の苟德培の墓がある。苟德培墓の現存状況は「院落」の範囲を限る土塀がなく、神道碑と後壁・封土だけ残っている。また、神道碑と後壁にもほとんど彫刻が無く、碑文の周りとは後壁の中だけ動物などの装飾文様と演劇場面が刻まれている。苟德培墓の建築構成や彫刻文様はすでに簡素なものとなっている。しかし、その神道碑は一般的な「上円下方」の形式ではなく、完全に位牌の形で建てられ、その碑文の内容や書き方も碑より位牌の方に近い。また、後壁の形式と内容や配置も上述の特徴を持っている。上述の四つの苟氏家族の墓を見ると、その彫刻は主に文章などの浅い浮き彫りであり、また、各自の墓の彫刻の主題や重心が異なっていることが確認できる。更に、長い時間に同じ場所で建てられたその四つの墓につ

いて、それぞれの特徴について分析する。それらの中の関連性も、後述する当時の「地上院落式」墓の造営体制の検討にとって意義があると考ええる。

三 匠師と造営体制

以上の三組の家族墓の状況を踏まえた上で、本稿の中心である匠師と造営体制について述べたい。その前に、まず「匠師」なるものが明・清時代の四川の墓葬造営のにおいてどのような意義を持つのか、確認しておきたい。一般的に理解すると、「匠師」とはものを造る人々の総称であり、昔から、中国の墓葬や造像などの造営事業の中でしばしば記録された者である。特に陶磁器・磚・瓦当などの表面に、品質管理のため製作所や製作者の名前が記された作例が多い。そして、墓葬などの大型建築については、四川の地元で現在も続いている工房の筆者による調査により、匠師とは、石に彫刻するだけの匠などとは違い、これらの「地上院落式」墓の建築責任者、即ち墓全体の設計者であることが明らかになった。また、上述のような作業を司る者は墓の銘文の中では九十パーセント以上が「匠師」と呼ばれているが、それ以外にも、「工師」・「工匠」・「工」などと記す銘文も見られる。前述したさまざまな彫刻の種類から考えると、「地上院落式」家族墓の造営は、「匠師」という設計者を中心に石彫工などの単一作業をする者と石材などを扱う臨時雇用者らが共に遂行した大型事業である⁽¹³⁾。また、これらの「地上院落式」墓は碑文や讃文などの文字の彫刻が多いため、匠師とその弟子以外に、各家族の内部からの墓造営の監督者や、墓主の姻戚者などで讃文を書いた人の名前も残っている。例えば、苟希文墓の中では、讃文を書いた人のうちに、墓主である苟希文の堂侄孫の苟承宗という者がいた。また、それらの墓の讃文の書体や形式はまちまちで、完全に一致するものは一つもなかったため、そのような讃文は撰者が筆で直接石に書いてから、匠師などがそのまま彫刻したことが分かった。

「匠師」の意味が分かったところで、「地上院落式」家族墓の造営体制について考えたい。先ず、「地上院落式」家族墓の建築材料はほぼ地元でよく見られる石灰岩や青石などの石材である。ゆえに、建築材料を得るのに技術的な問題はないため、臨時雇用者や家族の人々の手伝いで達成できた部分である⁽¹⁴⁾。次に、四川北部に現存する工房の中に、今でも伝統的な彫刻手法を用いる木匠工房がある。また、上述の工匠・工房は利用する材料によって石材（石匠）と木材（木匠）に分かれ、木匠は自分の家屋を工房として利用する例が多い。それに対して、明・清時期の四川北部の石匠たちは、石材自体の運びにくさや四川北部の山間地帯の地理条件のため、彼らの彫刻場所は仕事をする場所であると思われる。その点について、当時の彫刻技術と彫刻道具を考えると、一つの「地上院落式」墓を建造するには何年もかかることになる。そして、近代以降、電力を使う彫刻道具が出現したため、現存する石匠工房はほぼ明・清時期のものとは関係がないことがわかった。ゆえに、明・清時期の四川北部の石匠「匠師」たちは特定な工房がなく、弟子を連れて遊行するようにしながら仕事をする習慣になった。例えば、付表1の13番、巴中市化成鎮宋

家碕村に位置する雷輔天墓の左側には、残存石材の破片や石材を打った痕跡が残っている半円形のエリアがあり、そのエリアは当時、雷輔天墓の建築石材を裁断したり文様を彫刻する場所であった可能性が高いと思われる。

また、明・清時代の四川巴中の小説や竹枝詞⁽¹⁵⁾などの文学作品の中にも、石匠の給料は毎日彫刻した後に、彫り出した石粉、即ち廃料の重さによって支払われたことが記されている⁽¹⁶⁾。「一両石粉一両銀⁽¹⁷⁾」という言い方もあり、より高い給料をもらうために、高肉彫で彫刻文様を作ることが当時流行した。例えば、上述の三つの家族墓の作例には、建築年代や造営匠師はそれぞれ違うが、その中の花文様の彫刻手法はいずれも丸彫りに近い高肉彫になった。そうした特徴は以上の作例や花文様の表現だけではなく、筆者の調査作例の中で牌楼又は牌楼形の後壁があるものはいずれも上述の特徴を持っている。一方で、苟希文墓や苟徳培墓のように文字彫刻を中心とするものでは、主に浅い浮き彫りと平面的な描画で構成する例も存在する。

また、付表1にそれぞれ表示した王氏・李氏・苟氏家族墓の建築匠師の名前に注目すると、王氏家族の墓は同じ王氏家族の人によって作られたことがわかった。特に王思級墓の後壁の匠師の記名(図12)は、「造」と「修」の二種類に分けられていて、同じ墓の中には、重修すなわち建て直しについての銘文がないため、ここでいう「修」とは監修の意味と思われる。即ち、王思級墓の造営匠師と建築監督者も王氏家族の者だったのである。これと同様に、李氏家族の李時虞墓と李静観墓もまた同じ李氏家族の人によって作られた。

そして、現地に現存する石匠の資料と訪問調査⁽¹⁸⁾により、当時の匠師たちはその弟子を含めて、5人以下の少人数規模で活動していたことがわかった。それ故に、四川北部の巴中市平昌県における「地上院落式」家族墓の造営の流れは、建墓の要望がある家族から地元の匠師グループに先



図12

ず発注し、匠師たちは特定の工房で働くのではなく、墓を造営したいという注文をもらったら造営現地に赴いて、建築の設計と指導をおこなう。その例として、四川南部の小規模の「地上院落式」墓では、時には墓石の表面に造営時に匠師が画いた彫刻の下図を見ることができる（図13）。

以上をまとめると、「地上院落式」家族墓の造営の体制は、上に述べたように①匠師は設計者で指導者である、②工房を持たない流し仕事であった、③少人数作業、④一件一案のオーダー式、という四つの特徴がある。また、その「一件一案のオーダー式」については、時々例外がある。取り上げた三つの家族墓の中で、李時虞と李静観父子の墓は、そうした特殊な状態で建てられた。また、両者の造営年代には五十年近い隔たりがあるが、その建築匠師は同じ造営流派の師と弟子であったことが分かる。図14で示す通り、両墓は形式から彫刻文様や建築物の配置まで、全て高



図13



図14

い程度で一致している。また、二つの墓の後壁は図14の赤い楕円形で示すようにぴったり繋がっていて、前に述べたこの父子の墓が同じ華表と広場を共有していることと合わせて考えると、李時虞と李静観親子の墓は最初から一緒に設計されて、共に建造されたと推測できる。

また、前に言及した苟氏家族の苟德公墓の神道碑の形とその碑文の内容や書き方、位牌の類似性については、その建築匠師である「劉三益」という人物の個人的な特徴であり、また、近くに存在する苟端文墓との機能や存在意義の区別とも関連性があると思われる。さらに、苟德公墓の後壁の形式と内容配置も上述の特徴を持ち、苟氏住宅と繋がっている点から考えると、苟端文墓とは違って、嘗ては苟德公墓で日常的に参拝活動が行われた可能性が高い。

おわりに

本稿では、昨年筆者がおこなった現地調査の結果を踏まえて、明・清時代の四川における「地上院落式」家族墓の形式と構造に見られる、「地上」と「院落」二つの特徴について述べた。あわせて、「地上院落式」家族墓の特徴と形式分類において、これらの墓の形態の特異性を具体的に詳述し、特に取り上げて論ずることの意義について説明した。

また、現地調査をした十七件の「地上院落式」家族墓の中で、所在地が明確にわかり、建築構造がほぼ完全に保存されており、匠師の名前が弁別でき、それに関する碑文も判読できた三つの家族墓を中心に挙げた。すなわち王氏・苟氏・李氏の三つの家族墓である。それぞれの建築構成を詳しく述べ、それら墓の造営匠師や彫刻の特性などについて分析し、また、四川南部や後の時代の作例と比較して「地上院落式」家族墓の匠師は単に彫刻をする工人ではなく、墓の建築責任者で設計者であったことを論じた。更に、地元に残存する工匠・工房の調査と現在の石匠へのインタビュー調査から得た断片的な資料を整理し、明・清時代の四川省巴中市平昌県で活躍した匠師たちが、少人数での「流し」仕事の習慣に従っており、その造営体制は「一件一案のオーダー式」だったことも推測できた。

最後に、四川の「地上院落式」家族墓は、主に移民家族の墓であるという事実を踏まえて、「一件一案のオーダー式」の造営体制を考え、それらの墓の中の特例であり、苟德公墓の位牌に類似する形式について一言触れた。今後の課題としては、「地上院落式」家族墓は移民家族の祠及び住宅などの空間として利用された上、同じ直系祖先の身分認識に大いに関連性があると思われる。更に、これらの「地上院落式」の移民家族墓の形式の源をより深く求め、どこでどのように成立し、またどんな経路でどのように他の地域に伝播したかについても考えたいと思う。

注

- (1) 牌坊とは人物の功績を讃えるために建てる鳥居形の門である。
- (2) 王氏家族墓は巴中市平昌県筆山鎮觀寨村に位置する。現存する墓葬建築は二基であり、墓主は王居恭・王思級父子である。

- (3) 大田坎墓群は巴中市平昌県土興鎮大田村に位置し、地元の李氏家族に所属する。現存する墓葬建築は二基であり、墓碑等建築は五つ以上もある。墓主は李氏家族の李時虞・李静観父子を代表とし、咸豊年間から民国初期までの李氏家族の族人である。
- (4) 苟氏家族墓は平昌県龍鎮老鷹村に位置する。現存する墓葬建築は四基であり、墓主は先祖苟維模と彼の後代の苟希文・苟端文・苟德培である。以上の四つの墓葬建築の内、苟端文・苟德培父子の墓は同じ場所に建てられており、先祖である苟維模と、苟希文の墓はそれぞれ隣の山の異なる側に位置する。
- (5) 世代や長幼の序列を指す。
- (6) 旺蒼想文物保護管理所『旺蒼明清墓葬』、重慶出版社、二〇一三年、第002-007頁。
- (7) 曹銳「明・清時代の四川北部における地上院落式家族墓について―巴中市李映元墓を例に―」、『美術史研究』、五八号、第47-60頁。
- (8) 広東省文物局編『広東文化遺産・古墓葬卷』（第一版、二〇一三年）と温州文物局編・梁岩華主編『温州古墓葬』（第一版、二〇一五年）の図録に収録された情報から筆者が分析して得た見解である。
- (9) 上述の「地上院落式」家族墓を修築する者を指す。詳しくは本文「三 匠師と造営体制」を参照。
- (10) 『苟氏宗譜・平昌鎮龍観分冊』と「四川省巴中市文物局第三次文物調査」の記録により、苟希文と苟端文（一八八〇年没）は同じ世代の堂兄弟であり、苟希文の卒年は光緒三年（一八七七）と確認できる。更に、苟希文墓の銘文の中に、「□□□年歳次辛亥」という紀年銘があり、前の年号を弁明しにくい、印痕により、「光緒□年」又は「宣統□年」の二つの可能性がある。また、光緒年間は辛亥年がないので、ここの銘文は「宣統三年歳次辛亥」（一九一〇一）、即ち苟希文墓の建築年代は一九一〇一と認められる。
- (11) 『苟氏宗譜・平昌鎮龍観分冊』編纂委員会、『苟氏宗譜・平昌鎮龍観分冊』、私家版、二〇一〇年。本族譜は『巴州・苟氏総祠』、清・光緒二十四年（一八九八）刊本、六冊、山西省社会科学院蔵により編集され、地元の文物調査者である苟氏姻親の廖国宇氏から筆者は影印本をいただいた。
- (12) 同上注11、詳しくは図11「苟氏血縁譜系図」を参照。
- (13) 重慶師範大学美術学院の羅曉歆氏によるインタビュー調査（二〇一五年）に収録された、「梁平雙桂堂」の放生池の橋の両側の柱にある石獅子を彫刻した匠師（当時は学徒）の口述によって得た情報である。
- (14) 筆者が二〇一七年十二月に行った現地調査の時、李映元墓に位置する四川省巴中市黒馬山の山間石壁にたくさん小規模な採掘場跡が見られる。
- (15) 巴・蜀地域の民歌から改良した詩体の一つである。本文に論ずる明・清時代の四川竹枝詞は「張研『清代社会的慢变量：从清代基层社会组织窺中国封建社会结构与经济结构的演变趋势』、中国人民大学青史研究所学术书系、山西人民出版社、二〇〇〇年」を参照。
- (16) 魏明孔「从山陕会馆碑文（碑阴）看清代工匠地位及报酬」、西北大学报（社会科学版）・卷五一・第一期、山西人民出版社、二〇一四年。
- (17) 筆者が二〇二一年八月に行った現地調査で、付表1の番号1・5・9・13・15の墓葬を調査した時、墓主の後人へのインタビューから得た話である。
- (18) 同上注13。